



# 「平和とは何か」を問い続ける授業の考案

～高校生が提案する21世紀の平和教育～



## 研究背景

TGISSで過ごした前期課程（中学校相当）の3年間において、社会科の授業のほか、2年次のコバルト会議、3年次で沖縄WCを含め様々な形の平和教育を経験した。多様な形で学びを得る中で、社会科における平和教育の理想像とは何かという問いが生まれた。

昨年度は平和教育の課題を調査し、焦点化したうえで、「平和を問い続ける授業」が生徒の「平和」の捉え方を拡張し【仮説α】、「Active Citizenの育成」が平和の実現に寄与する資質・能力を育てる【仮説β】、という2つの仮説を設定し、**中学校3年の社会科歴史的分野**の授業案の制作に取り掛かった。

## 研究目的

高校生の視点を駆使して、授業案の開発に取り組み、2つの仮説と授業案の**効果と限界**を明らかにする。

## 研究方法

### 1. 《仮説の設定》理想の平和教育の仮説を立てる

先行研究や先行事例を調査したうえで、**資料館の学芸員・解説員、大学教授・准教授、文部科学省の関係者など、幅広い立場の方**にお話を伺う、外部連携・外部調査を行った。さらに、**私たちの個人的な経験**と照らし合わせた上で、**平和教育の理想像**に必要な要素を挙げ、私たちが考える理想の平和教育の仮説とした。（仮説は「研究背景」で提示）

### 2. 《仮説の表現》授業案で理想の平和教育を翻訳

\*「翻訳」＝教育研究における表現から教育現場に対応した表現に変更する

右図に示した5点で構成される**授業案**を考案することにより、**1.の仮説を表現**する。教育研究と教育現場の乖離を踏まえ、学校現場で用いられる授業案に表現し、その検証を通して平和教育の課題に対して多角的に向き合う。

### 3. 《仮説の検証》授業案の検証・改善

設定した仮説とその**授業案への表現の効果と限界**を、主に**生徒への影響**に焦点を当てて検証した。授業実践は困難であるため、教育やシベリア抑留に様々な形で関わっている方々に評価をしていただき、**授業を通じた検証を疑似的に再現**した。なお、検証は数値的データを主とした**第1次検証**、インタビュー調査を行う**第2次検証**に分けて行った。

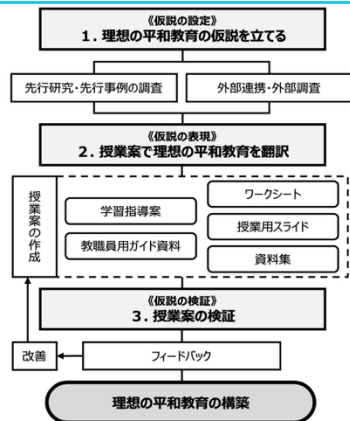


図1 研究のフローチャート

## 研究結果

### 《仮説の表現》

1限	<b>学習目標</b> ～平和についての導入～ > 教員による導入：なぜ私達は平和を学ぶのか > 「平和とは何か」についてのディスカッション
2限	<b>学習目標</b> ～シベリア抑留を「知る」～ > 『ラゲリより愛を込めて』教材DVDの視聴 > シベリア抑留に関する教員による説明・個人調査
3限	<b>学習目標</b> ～シベリア抑留を「学ぶ」～ > シベリア抑留に関し、興味に即した個人調査 > ロールプレイ活動
4限	<b>学習目標</b> ～実社会とつなげる～ > 現代社会とのつながりに関する探究課題(グループ)
5限	<b>学習目標</b> ～平和と自分をつなげる～ > 4限目の探究課題の発表 > 「平和とは何か」についてのディスカッション

図2：私たちが考案した授業案の単元の流れ

\*「知る」とは知識をインプットすること、「学ぶ」はインプットした知識をもとに考え発信するアウトプットを含む。

題材はシベリア抑留とし、図2のように、単元の学習活動を設定した。

【仮説α】に沿って、**単元の最初と終わりに**「平和」について考えるディスカッションを取り入れ、生徒が平和に関して考えつづけられるようにした。

【仮説β】の実現のため、3限目に**ロールプレイ活動**、4限目に**探究課題**を設定した。これらを通し、生徒の平和的な問題解決のための協同性や対話力、課題解決力等が育成されると同時に、多様で主体的な行動のきっかけをつくる。



↑ 授業案はこちらから

### 《仮説の検証》

第1次検証では大学教授・研究者、教職員、学生、出版社の方々、教育センター等の職員、資料館の職員の立場で活躍している合計19名への調査を行うことができた。数値的データとともに、第2次検証の質問のもととなる記述を取得した。

第2次検証では教育やシベリア抑留に多岐にわたって関わっている合計10名の協力を得て、対面・オンライン形式でのインタビュー調査を行うことができた。質問は第1次検証の回答内容や立場（職業など）に即したものが選択され、仮説や授業案に関して以下に示すようなフィードバックをいただいた。

#### 【仮説・授業案の効果】

- ・授業内外で「平和」に関して生徒が考えられるようになる
- ・生徒の自主性や独創性を引き出す
- ・平和に対するアクションを起こすことができる人の育成の契機を作り出す
- ・実社会との関わりの認識や多面的・多角的な学びを作り出す
- ・ひたすら相手の立場に立つ、相手のことを知るなど、相手の気持ちを考えることができる

(一部を抜粋)

#### 【仮説・授業案の限界】

- ・授業案への表現の段階で「戦争以外の出来事」や「平和とその対義語」に過度に固執してしまったことにより、平和の概念やアプローチを限定する授業案となっているのではないか。
- ・「平和」について考える活動は最初と最後だけで良いのか。単元を通して考え続ける必要があるのではないか。
- ・リフレクションの機会がもっと必要ではないか。

(一部を抜粋)

## 結論

【仮説α】に関し、**生徒の「平和」の捉え方を変容する効果**があることが明らかとなった。【仮説β】については、**実社会との関わりの認識や多面的・多角的な学び**が想定される一方、平和の実現に寄与する資質・能力を生徒が身につけられるようにするためには「**アクション**」の**再定義の必要性**があることが分かった。

また、授業案は教員にとって取り入れる抵抗感が少ないとみられるため、**授業案を作成するという手法には教育研究と教育現場を結ぶ効果**があると評価できるが、**単元前後の意識づけや学習活動における難易度や資料の選択、シベリア抑留の多面性の扱い方**など、授業案の内容には数々の課題がある。

したがって、今後の展望としては、授業案の内容の再考が挙げられる。再考は検証にご協力いただいた方々の意見を伺いながら行っていくが、第1次検証にて専門知に偏重していることが指摘されているように、今年度は教育を受ける視点の声を十分に収集することができなかった。今後は**高校生など教育を受ける側の視点**も積極的に取り入れていきたいと考えている。特に、次年度は中学3年生を対象にしたワークショップを行い、**仮説と授業案のブラッシュアップ**を目指す。

## 参考文献

竹内久題(2011).『平和教育を問い直す：次世代への批判的継承』法律文化社。  
村上登司文(2022).『2000年代以降の平和教育研究の動向と成果』『広島平和科学』,44,1-24. など

## 謝辞

本研究の検証や外部連携において協力いただいた多くの皆様へ深くお礼を申し上げます。誠にありがとうございました。